

いずれにしても、『医事撥乱』完全本の写本である『医事撥乱解』の資料的価値は大きいといえよう。今後、大式の医学について論ずるには、部分刊本の『柳荘先生医事撥乱正篇』ではなく、この完全本によるべきであろう。

なお、山県大式の医学論については、『医事撥乱解』の本文を十分に検討し、別の機会に報告することとしたい。

(医学書院)

## 「三伯稻荷神社」について

森 納

「近代日本の医学」(阿知波五郎著、昭和五七年)に阿知波先生が鳥取市川端三丁目の稲村三伯の生誕地を訪れられ、生誕之碑、略歴を書いた案内板を見た記事を載せておられる。その記事に『驚いたことには「三伯稲村神社」があったことである』として書かれている。また更に「医学史点描」(阿知波五郎著、昭和六一年)に『川端町三丁目の稲村三伯生誕地を訪ねる。近所の人もよく知らない。やっとみつかったのは「三伯稲荷神社」という祠である。三伯がお稲荷さんになっているのには驚いた。そのお稲荷さんの入口に等身大よりやや大きい「稲村三伯先生生誕之地」の石の指標が立っていて、その反対側に、ペンキ塗りの「稲村三伯先生略歴」がかかっている』と述べられている。

そこで地元の人としてこの「三伯稲荷神社」の存在の有無を調査した。「稲村三伯生誕之地」の石碑は確かに鳥取

市川端三丁目一二〇番地の町内会館の前に建っていて、その裏に稲荷神社があった。その由来と、三伯との関係について古老を尋ねて聞いた。それによると稲荷神社は三伯とは全く関係なく、昔からこの地にあったという。昭和二十七年四月一七日の鳥取大火の折、川端三丁目一帯が焼失した。その後、この稲荷神社は再建された。稲村三伯の生誕した家は川端四丁目にある真宗寺の前で、川端三丁目地内にあつた。大火後、三伯の顕彰を提唱する人々がいて、旧

三伯屋敷跡地に土地を求めたが、どうしても得られず、止むを得ず、同じ町内の稲荷さんの前庭に建てた。どうして「お稲さん」の前に生誕の地の石碑を建てたのか、その理由については「三伯先生がこの附近にしばしば往診に来ていたためでしょう」との事でそれ以上明らかにすることは出来なかつた。その後になつて稲荷神社と石碑の間に町内会館が建てられたというのである。稲荷神社の名は地元で単に「お稲荷さん」、「川端三丁目のお稲荷さん」と呼ばれ、京都伏見の稲荷神社から勧請して来たものという。このことは同町内の小谷名香（七七歳、女）、山根長太郎（七八歳、男）の二人の古老より尋ね得たものである。

なお前述の「医学史点描」三一六頁の二行目の『涌岡義博著「稲村三伯」に拠る』の涌岡義博は涌島義博が正しい。そして先述の「三伯生誕之地」の石碑建立の提唱者の一人であつたと推定される。稲村三伯と稲荷神社を結び付けたのは、阿知波先生を案内した土地不案内の者の説明不足であつたものと思われる。

（鳥取県開業）